



## 特別展「みんなで学ぼう日本の憲法」 4月29日(火・祝)～5月31日(土)

わが国での最後の戦争が終わって68年余が経過しました。この間、わが国は世界各地の戦争に巻き込まれることはありませんでした。「平和憲法」と呼ばれてきた「日本国憲法」の力であったと思います。この憲法が、いま危機的な状況にあります。政府は国家安全保障会議の設置、特定秘密保護法の制定に続いて、集団的自衛権の行使を容認しようとしています。

いまこそ、私たちは、「日本国憲法」に親しく接し、これを正しく理解し、これまで享受してきた平和な社会を次世代に引き渡していきたいと願い、この特別展を企画しました。

自民党は、すでに憲法改正案を公表し、そこでは第9条を変え、国防軍の創設、集団的自衛権の行使を掲げています。また「公益」「公の秩序」が優先され、これによって基本的人権の制約も可能な内容になっています。この改正案は、「憲法は国家権力の乱用に対する歯止めである」とする立憲主義自体を否定して



特別展チラシ

います。憲法改正の理由として、現憲法は占領軍から押し付けられたものだ、翻訳調だ、環境権など新しい権利の記載がなくて不備だなどと説明されていますが、この改正案の目的が第9条の改憲にあることは明白です。

しかし、世論調査などでは、憲法第9条は国民の多数に支持されています。そのため、政府は憲法の改正ではなく、第9条の解釈を変えて集団的自衛権行使の道を開こうとしています。

平和のために戦争の事実を次世代に伝える活動をしている「ピースあいち」は、これらの第9条改憲の動きから目を放すことができません。マスメディアもこの改憲の

動きに危機感をもって報道し、ようやく国民の間にも議論が広まってきました。

いま、この時期に憲法についてしっかり学ぶことはたいへん重要なことと考えます。憲法に関する本をたくさん紹介し、憲法に親しみ、改めて憲法とは何かを考え、現憲法の素晴らしさに出会ってほしいと願ってこの展示会を開きます。多くの皆さまのご来館をお待ちしています。

## 恒例の「ピース祭り」 開催します!

5月11日(日)

午前11時～午後4時

無料開放

今年は、「ピースあいち」がある名古屋市名東区の「名東の日」に合わせて開催します。お楽しみのバザー、カフェ、手打ち讃岐うどん、平和団体活動紹介コーナーがあります。

- 現憲法の前文と第九条をはじめ主要な条文を展示。あわせて、それを平易な文章に書きなおしたものを展示。
- 小・中・高校の教科書—現憲法の成立過程とその内容の概要を紹介
- 現憲法と自民党改憲草案との比較を紹介
- 現憲法の三大原則を教科書で展示
- 軍隊を持たない国が世界で27カ国ある。これらを世界地図で示す。
- 憲法に関わる本を読んだ感想文
- 新聞の社説と読者の投稿文
- 来館者にも憲法に関するコメントを公募し、展示する。



## モノの声を聞いてください。

### 「モノが語る戦争とくらし」展(第3回寄贈品展)2013年12月5日(木)～12月25日(水)

「寄贈者並びに入館者に直近の寄贈品を紹介することにより、戦争の実態を伝え平和の尊さについて考えていただく」という開催の目的のもと、2011年9月から2013年7月までに寄せられた48名の寄贈者の寄贈品185点のうち100点を解説付きで展示しました。

7月末から資料班を中心に約15名が準備をすすめ、12月4日に資料・製作物等の展示を終えました。今回展示できた寄贈品は、陸軍、海軍、近衛兵の大礼服や軍服をはじめ掛軸、ちゃんちゃんこ、アサヒグラフ、はては濃尾大地震写真帖までの多種多様な寄贈品を「軍隊生活」と「国民生活」に大別して展示しました。「モノは黙して語りません。しかし展示の品々を巡り、しばらく佇んでいると、モノは語りかけてきます。その声を聴いて下さい。」という想いができるだけ具現化できるように配慮して並べてみました。

開期中は、「メーテレ」の「秘密保護法」をからめた2度の取材があり、延べ2日間のテレビで会場が放映されたこともあったのか、招待状をお出しして、来ていただいた18名の寄贈者の方をはじめ236名の方にお



越しいただきました。ご覧いただけた方の感想を見えますと、「父の出品物で、はじめて見たものもあり、戦争のすごさをあらためて思い知らされました」とか「寄贈品を所有していた人、またその家族の人生が戦争の時代も含めてあったという事を思い、同様な時代が繰り返されない事を願うものです」などがありました。

第4回の寄贈品展を開く時には、今回の反省を生かして、楽しく、より良い展示会にしたいと思います。

### 「戦争の中の子どもたち」展 1月14日(火)～2月28日(金)

「次世代を担う子どもたちに配慮した展示が欲しい」と始まった子どものための企画展は、ボランティア手作りの展示で、今回が3回目である。マンネリとの声も聞かれたが、今回は、三重県の歴史教育者協議会会員として活躍されている小学校教員・岩脇彰さん(汐文社より『平和を考える 戦争遺物①子どもたちと戦争』を出版、「ピースあいち」も協力)の協力を得て、より完成度の高い展示に仕上がった。

今から70年ほど前、日本は戦争をしていた。戦争は、子どもたちの暮らしにも大きな影響を与えた。子どもたちは小さい頃から、おもちゃや文房具、絵本、雑誌などを通して「戦争するのは当たり前」「兵隊になるのは当たり前」という気持ちを植え付けられた。学校では、「戦争に勝つため」「強い兵士を育てるため」の教育を受けた。やがて取り返しのつかない悲劇に巻き込まれていった。その中でもたくましく生きた子どもたちの姿があった。

そうした戦時下の子どもたちの様子を20枚のパネルにまとめた。パネルに引用した資料や写真を掲載するに当たっては、今回、展示制作メンバーはできる限りの努力を惜しまなかった。実物資料は、「ピースあいち」が



所蔵する資料の中から約70点を選んで展示した。メンバーが古書店などで購入した書籍も含まれている。その中の漫画「のらくろ」や「冒険ダン吉」は、子どもたちが手にとって読めるようにした。

最後は、昨年の沖縄戦全戦没者「慰霊の日」追悼式で小学校1年生の男の子が朗読した「平和の詩」を取り上げ、子どもたちへのメッセージとした。

この展示が、「戦争と動物たち」の展示とともに、今後も子どもたちが戦争や平和について学び、考えることのできる場になれば嬉しい。

開催します!

### ベトナム戦争の記憶・写真展 「ベトナムの枯葉剤～ ダイオキシンを追いかけて～」 4月1日(火)～4月19日(土)

ベトナム戦争は、15年間続いた冷戦時代を象徴する戦争であり、50万人近い市民の犠牲を出したと言われていいます。さらに悲惨なことに、大量に使用された化学爆弾(枯葉剤)には猛毒ダイオキシンが使用され、広大な原生林は枯れ果て、動植物も死に絶えました。枯葉剤の悲劇は、「ベトちゃん、ドクちゃん」以上の悲惨な犠牲者を、今なお、出し続けています。

この悲劇を訴えたいと西村洋一さんは、教員退職後ベトナムで3年半ボランティアをしながら枯葉剤/ダイオキシン被害者を撮り続けました。

### 企画展 「戦争と若者―断ち切られた命と希望」

7月22日～8月31日(予定)  
期間中日曜日開館(休館日は月曜日)

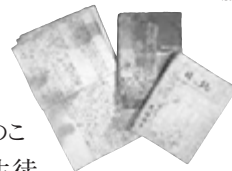
戦争は過去のものとなり、記憶の中から薄らいでいます。映像の中で見る戦争や貧困の姿は人の痛みを伴わなくなりました。この展示会では、戦争がいかに若者たちの運命を変えたかを問いかけます。

展示は、1.戦没学徒の遺書、遺品(わたつみのこえ記念館蔵)、2.空襲の犠牲となった学徒動員生徒たちの遺品(立命館大学国際平和ミュージアム蔵、桜ヶ丘ミュージアム蔵)、3.戦没学徒の絵画(戦没画学生慰霊美術館無言館蔵、予定)で構成されます。

70年前の若者たちが残した遺品の前に立ち、声なき声、姿なき姿に思いを巡らせてみましょう。日本が戦争のできる国に変容しようとしている今。



中野千鶴子さんのセーラー服



大林淑子さんの日記と歌集

### 「語り継がれる戦争～ 眉山女学園中学・高等学校の平和教育」

2013年11月30日～12月25日

生徒たちが制作したレポート展示で、平和教育への取り組みが一覧できました。



中学では沖縄修学旅行

で、高校では30年以上続いている長崎修学旅行で、戦争体験者から直接話を聞いてまとめています。マンガやイラストを添え、生徒それぞれが育んだ等身大の平和への思いが見て取れる素晴らしい内容でした。若い世代が戦争を語り継ぐ取り組みに、勇気づけられました。

### 三十一文字の「ピースあいち」応援歌 池田美恵子 平和を詠う 「戦争と平和の資料館」展

2014年1月21日(火)～2月28日(金)

新年早々の2階プチギャラリーを飾ったのは、短歌4首。作者の池田さんは、日本歌人クラブ会員・中部日本歌人会員です。「昨年、地下鉄の一社駅から『ピースあいち』に向かう道に、雑草スベリヒユが、



青く勢いよく伸びていました。命、愛、平和を大切に私たちを応援してくれているようで、感激して歌が生まれました」。

それ以来、「ピースあいち」を訪ねるたびに展示室のパネルとの心の交流を図り、「涙を流しながら次々と歌が生まれたのです」。「三十一文字」に込められたあふれる思いが伝わってくる展示でした。

### 「福島はいま 東日本大震災から3年」 2014年3月4日(火)～3月29日(土)



あの3.11から3年。南相馬を拠点に活動している「NPOチェルノブイリ救援・中部」の協力で開催した企画展と講演会。原発による放射能汚染の深刻な現状と、あきらめずに復興の努力を続ける人々の姿を資料や写真で伝えています。

同時開催された、家族みんなが安心して住める南相馬市にもどしたい!とがんばる“フロンティア南相馬”の「みんなの写真展～南相馬のいま」は、私たちに希望を与えてくれました。

## 平和へのメッセージ

今、戦争ができる国への準備が着々と進められています。戦前の状況になりつつあるという指摘もあります。「平和」であることが人類にとって一番幸せです。4人の方に平和への熱い思いを語っていただきました。

### 反戦と平和への熱い思い—夫の戦死と敗戦—

青木 みか(名古屋女子大学名誉教授)

夫は終戦2カ月前、1945年6月に戦死した。彼27歳、私は20歳。平和主義者の彼は、大学の工学部で研究生活を送っていたが召集された。船舶兵として任を果たしている時、日本海でアメリカの魚雷を受けて船は沈没。結婚生活は1カ月で消滅した。

その後、私は平和運動に従事し、2005年に創設された「あいち女性九条の会」の一発起人ともなった。しかし今日の世相を省みると危惧せざるを得ない。

安倍晋三首相の靖国神社参拝をはじめ特定秘密保護法の成立、防衛予算の増額など保守化が強化される。さらに今、集団的自衛権の行使容認に踏み込まんとする現政権に対し、一国民として疑問や不安がつきまとう。1924(大正13)年に成立した治安維持法は、国体の変革を目的とする活動を取り締まった。今日の特定秘密保護法との共通点は、自由を縛る側面があり、違反者に刑事罰が科せられることである。

当時の加藤高明内閣は普通選挙法を作り大正デモ

クラシーの申し子のように言われたが、翌25年維持法が公布された際、違反者への最高刑は「十年以下の懲役又は禁固」とあり、3年後に死刑が科せられ、厳罰化された。東京朝日新聞は「…治安維持法許すべからず」の社説を載せて警鐘を鳴らしたが、言論機関も次第に自由を失い、ついに無謀な戦争に突き進むことになった。

今日の政界は戦後生まれの人が占め、戦争体験者はいない。前者の轍を踏まないよう警告する人もなく、残酷な戦争の実態は風化されつつある。今の平和は莫大な犠牲の上に築かれたものであることを忘れてはならない。

私は拙書『どうして戦争をはじめたの?』(2002年)、『危ない戦争がつくられる』(2006年)、『平和をつむぐ』(2011年)などなど、いずれも風媒社から出版した。

昨年、卒寿をパスし老衰を実感するが、反戦と平和への熱望はますます増強している。



### 希望はつながっていく

野間

「戦争は秘密から始まる」と言われます。本当のことが国民から見えにくくなったとき、戦争の影が忍び寄ってくることは、多くの歴史が示しています。

安倍首相は、「国家の秘密を保護しなければ国の安全が守れない」と言っていますが、戦後68年間、日本に秘密保護法はありませんでしたが、そのために日本が危うくなったことがあったのでしょうか。日本が危ういのは、まず、52基の原発と大量の核のゴミがあることであり、国が尖閣諸島を買ったり、慰安婦問題を否定したり、総理大臣が靖国神社を参拝したりすることで、近隣諸国との緊張を招くからではないですか。集団的自衛権と称して、地球の裏側へ自衛隊が出ていくようになったら、それこそ日本は危うくなります。

自民党が相対多数をとって政権に就いていますが、国民は自民党に、まして安倍首相に白紙委任状を与えた訳では決してありません。秘密保護法、国家安全保障基本法、集団的自衛権、教育改悪、原発再稼働などな

美喜子(「ピースあいち」館長)

ど、国民はその意思を選挙で問われたことはないし、多数が賛成したという事実は一切ありません。一体何を根拠にそんな暴挙ができるのでしょうか!何か「勘違い」しているとしか考えられませんが、政治が「勘違い」で動くとなれば、これほど恐ろしいことはありません。

それなのに、安倍内閣の支持率が、「経済政策に期待がもてる」という理由で高止まりしているのは、どうしたことなのでしょう。「今だけ」「カネだけ」「自分だけ」という禍々しい「三本のたけ」が日本中に生え広がってしまったのでしょうか。そうは思いたくありません。

日本の隅々で、国の右傾化の動きに抵抗するさまざまな活動が展開されています。一つひとつは小さな活動であっても、希望はつながっていきます。平和憲法下で育まれた民主勢力の力量が今こそ試されています。何としてもこの苦境を乗り越えましょう。



## いまこそ、戦争と平和を語るとき

塚田 薫(大学生『日本国憲法を口語訳してみたら』著)



身も蓋もない言い方だが、戦争はもはや彼方の出来事ではない。1989年生まれの私にとって、それは2つの意味で隔たりがあるのだ。

まず戦争の形が日本社会が記憶しているものから大きく変化しつつある。例えばアメリカ軍が所有する軍用機のうち無人機は既に約3割に達している。陸上戦においても、近年の戦争では民間軍事企業に戦争に関わる業務を委託することは当たり前となった。

そして敗戦から40年ほどが経った日本で、冷戦もとりあえずの終結へ向かいつつあった年に生まれた私は、戦争の記憶から広く断絶された場所にいる。既に共通認識としての戦争体験は失われつつあり、また多くの戦争は私にとって記憶ではなく記録の中にある。さらにその記録のメディアはかつては口伝によるものだったものが、フィルムとなり、デジタルとなった。出来事に伴う身体感覚の残滓は、それを語るメディアの変化に伴い洗練されていった。youtubeでは、アフガニスタンで活動するアメリカ

軍兵士のヘルメットに搭載されたカメラによって、戦場の光景を一人称で見ることができる。空爆の様子も爆撃機のガンカメラによって見ることができる。しかし克明すぎる絵がリアリティを失うように、それらのメディアは現実感を失い、日常に埋没していく。今後先進国において、戦争による加害・被害、双方の痛みは洗練されていくだろう。

戦争について語る事が難しい時代になりつつある。しかし、そうであるならば今こそあえて語り、そして耳を傾けるべきではないだろうか。我々は口伝によって知ることができる最後の世代となるだろう。最も直接的なメディアである人間自身はまだここにいる。ただ問題となるのは断絶だ。もはや戦争を語る「お約束」は通用しない。

それをどう埋めていくことができるだろうか。我々の社会と、戦争と平和との関わりを考える上で、今後重要なキーとなるだろう。

## 大先輩たちの足跡を歩いてみたら

なか としお(演出家 平和を願う演劇の会・略称「平演会」)



先日、「プロレタリア演劇」の戯曲をリーディング公演する企画があり、私もそれに参加させていただいた。私は、三好十郎の作品を演出したのだが、他にも秋田雨雀・平沢計七の作品が上演された。

明治になって演劇の近代化を必須とした演劇人達は、新しい道(新劇)を模索していく中で、大正末から昭和初期にかけて、世界的な労働運動・社会主義運動の高揚を受けて、労働者農民の解放闘争と演劇運動の前進に命を賭して苦闘した。その道は、戦争への道を邁進していた天皇制国家権力に対する、真正面からの闘いであった。

実は私、恥ずかしいことに、そういう歴史を知識としては知っていたが、それらの戯曲の唯一つも読んだことがなく、今回初めて触れたのだ。それは、新鮮な驚きと感動であった。私は、それらはどうせ、戦争反対、団結して権力と闘おうという教条主義的な、結論ありきの稚拙な芝居に違いないと高をくくっていた。ところが豊岡らんや、登場人物一人ひとりがきちんと描かれていて、劇的にも優れた戯曲であった。戦前の演劇人達は、人権も何も無い世の中にあって、それを侵してくる国家と闘いながら、必

死で芝居を創り続けた、その確かな足跡がそこにはあった。

今、戦争する国づくりが極めて急速に進行中だ。民主主義の根幹が民主主義の名において破壊されようとしている。これまで深く潜行していたものが一気に表面化して、極めて深刻な事態である。その危険な動きに対して、何を為すべきか。今は、「プロレタリア演劇」の時代と違い、世界に類がない第9条を掲げ、基本的人権を保障する日本国憲法が存在しているのだ。その現在、何を為すべきか。

ドイツの元大統領ヴァイツゼッカーは「過去に目を閉ざすものは、未来にも盲目」と言ったが、それは過去の負の遺産を忘れるなどということだけではなく、未来に向かって果敢に抵抗し闘った多くの人たちが何を成し得たか、成し得なかったか、それに学ばなければならないという意味でもあったのだ。

大先輩たちの闘いぶりに触れた体験は、まことに得難いものであった。芝居人の一人としてのこれからの課題が見えてきたのである。

## 「ピースあいち語り手の会」が『語り継ぐ私の戦争体験』(第二集)を発行

「ピースあいち語り手の会」は2009年7月に80名余の会員登録を得て発足しました。以来、愛知県下の小中学校をはじめ高校、大学、各種団体などへ語り手を派遣する事業や、「ピースあいち」来館者への語り事業などを積極的に行ってきました。

また、戦争体験を後世に伝えるために、記録集や映像の制作にも力を注いできました。その一環として、『語り継ぐ私の戦争体験』(第一集)を2010年10月に発刊しました。

その後、自分も体験記を書きたいとの声を受け、主として語り手の会員による体験手記を募集し、この程『語り継ぐ私の戦争体験』(第二集)を刊行しました。

中国戦線の戦場体験をはじめ、従軍看護婦、学童疎開、名古屋空襲、勤労働員、原爆体験などと合わせ、戦争末期の2つの巨大地震(東南海地震・三河地震)の体験記録を掲載しました。

読んでみたいと思われる方は、「ピースあいち」にお問い合わせください。



## 名古屋空襲犠牲者追悼の夕べ 3月15日(土)

63回の空襲で1万4千トン以上の爆弾と焼夷弾が投下され、7,802人(『新修名古屋市史第6巻』による)が犠牲になったとされる名古屋空襲(1944年12月13



日~1945年7月26日)。その犠牲者を追悼する恒例の「ともしび法要」を行いました。今年は、「緑風の会」による朗読、歌とバイオリン、そして「ピースあいち語り手の会」による戦争体験の語りもありました。

## 名古屋空襲がマンガに『あとかたの街』

名古屋出身の漫画家おざわゆきさんが名古屋空襲をテーマに描くマンガ『あとかたの街』が、講談社の女性コミック『BE-LOVE』に1月号から連載されています。戦争体験のないおざわさんが、ご自身の母親の体験をモデルに、戦争の悲惨さをマンガで表現し、次の世代に伝えていこうという姿勢は素晴らしく、また、より正確に伝えるため、記録や資料を調べ、戦争体験者の話を聞き、「ピースあいち」にも何度も足を運ぶ姿勢に敬意を表します。今後の物語の展開にも期待します。



## 資料館探訪 9

### 撫順(ぶじゅん)戦犯監理所

中国東北地方(旧満州)は戦前日本が支配していた所である。そのため、幾つかの戦争資料館がある。撫順(ぶじゅん、フーシュン)戦犯監理所もその一つである。

撫順は石炭の露天掘りで有名な所である。15年戦争中、日本は撫順鉦山で中国人を酷使した。そのため、反日運動が強く、日本軍は抗日中国人を収監するために「撫順監獄」を造った。それが戦後、日本人戦犯の収容所になり、撫順戦犯監理所と言われるようになった。

「監獄」という予備知識があったので、頑丈な塙、暗い監房を予想していたのだが、建物の色は明るく、緑豊かな庭園、体育館があり、部屋も清潔であった。1950年、毛沢東等の指示により撫順監獄を改修し、現在のものにしたという。

1950~1970年代までに日本人戦犯982人、満州国戦犯71人が収容されていた。満



州国戦犯の中には満州国皇帝溥儀も含まれていた。館内には当時の写真や日本人戦犯の持ち物等の現物が陳列されている。そのうち、80個ほどが溥儀のものである。

学芸員からは、「ここでは中国の戦場で犯した行為をみつめ、反省するという『認罪』という教育が行われた。一部、有期刑を受けた人もいたが、死刑判決は無く、日本人は全員が帰国を許された。」との説明があった。(N)

## 平和をテーマとした影絵と群読の集い 1月18日(土)

1月18日(土)、千種区の学童保育所に通う小学生らによって平和をテーマとした「影絵」と「群読」の集いが行われました。参加者は演じた子どもさんらを含めて50人を超え、巧みな影絵操作や群読の語りに盛大な拍手を送っていました。

第一部は高見学童保育所の子どもたちによる「影絵」のドラマ「ぞうれっしゃがやってきた」。先の戦争時、東山動物園の猛獣が射殺されましたが、4頭の象だけは残されました。その後、栄養失調で2頭の象は死んでしまい、残ったのは2頭でした。

戦後、この象を見るための「ぞうれっしゃ」を走らせることになりました。大勢の子どもたちは象の逆立ちや樽を転がしたりする曲



芸を楽しみました。

影絵の象は学童保育所の先輩たちが作ったものですが、精巧に作られています。スクリーンの向こうで影絵を操るのも台詞を語るのも、小学生の子どもたち。一人で二役を担う子もいて見事でした。

第二部は大和学童保育所の6年生による群読です。物語は長崎を訪れた子どもとの対話から始まります。原爆投下直後の情景が再現され、5つになる姉が息絶え絶えの弟を介護しています。川の水を汲んだものの、泥水で飲むことはできません。「水を下さい」と願う弟に、噴水の清らかな水を飲ませたい姉の切ない思いが語られます。

群読の子どもさんらは台本を朗読するのではありません。この作品を語っています。発声はメリハリがあり、明瞭です。立ち位置も自在に動き、物語に奥行きを与えていました。切なく感動的な物語で、涙をぬぐう人もいました。



### 派遣授業、子どもたちの感想 「戦争を考えることができた」

「ピースあいち」では、戦争体験を伝える派遣事業をやっています。1月10日、竹川日出男さんと井戸早苗さんが市内の小学校で、6年生を対象に戦争中の暮らしの話をしてきました。そのときの児童たちの感想です。(一部分)

- ◎戦争を体験していないから、その時の感情は分からないけれど、今日の話で怖かったんなあと思いました。(男子)
- ◎戦争のおそろしさは、今も昔も同じだと思います。今、私の父が戦争へ行ったりするなんて考えられません。

やっぱり、人の生活がガラッと変わってしまうんだと思います。これからも忘れずに、戦争に心をとめてすごしていきたいです。(女子)

- ◎今日、私が思ったのはこの話をしっかりと次の世代へ伝えていかなければいけないということです。次の世代がこのことを知らなければまた同じことが起きるような気がします。(女子)
  - ◎ぼく達は当たり前のように米を食べています。でも、昔はそんな簡単に米が手に入らないという事が今回話を聞いてよく分かりました。だから、これからはごはんや米を大事にして食べようと思いました。(男子)
- ※素晴らしい感想がたくさんありますが、紙面の関係上載せられないのが残念です。

## ボランティア全体会 3月15日(土)

恒例の全体会が37名の参加で開かれた。開会にあたり、1月に亡くなった加藤たづさんのご冥福を祈って黙祷をした。野間館長も挨拶の中でたづさんとの交流を語り、ご遺徳を偲ばれた。

第一部の「情報連絡会」では、まず、宮原事務局長から来年度の主な活動計画の紹介があり、特に夏の企画「戦争と若者たち展」の構想が詳しく報告された。「各班・委員会・グループより」の活動報告では、8人の代表から熱いメッ



## 加藤たづさん逝去される

ピースあいちの土地と建物をご寄付下さった加藤たづさんが、1月23日逝去されました。93歳でした。千種にあるケアハウスで余生を送っておられましたが、昨年12月から体調を崩されたとのことです。ご最期はとても安らかだったと聞きました。お通夜やご葬儀には、「ピースあいち」から館長、事務局長ほか数人が参列しました。祭壇は、「ピースあいち」がオープンしたときの感謝状や「はだしのゲン」のポスターや、館の案内リーフなどに囲まれました。ご遺族からは「伯母はピースあいちを誇りにしていた」と言っていました。加藤たづさん、ご芳志は「ピースあいち」に日々生きています。本当にありがとうございました。

セージも送られた。「ボランティア班」よりでは、竹内事務局長次長が「ボランティアの要望」状況を報告、了解された。

第二部の「ボランティア親睦会」では、みなさん個性溢れる自己紹介をされたが、共通していたのは「ピースあいち」への熱い思いであった。

月一回の発行で「ピースあいち」の活動がタイムリーにわかる「ピースあいち・メールマガジン(無料)」。「ピースあいち」のホームページからお申し込みください!

## 会員確保1,000名をめざして

「ピースあいち」の基本財源は、大人300円(子ども100円)の入館料と会員の皆さんの会費(正会員=6000円/賛助会員=3000円)です。「ピースあいち」開館以来数年間、正会員・賛助会員合わせて約800名で推移してきましたが、最近大きく減少してきました。基本的要因は会員の高齢化です。

この現状に危機感をいだき、私たちは昨年夏、会員拡大に取り組みました。その結果、今年2月末現在で、正会員=352名、賛助会員=596名、合わせて948名となりました。

私たちは、当面1,000名の会員確保をめざしています。それを収入に換算すると正会員400名、賛助会員600名で420万円です。「ピースあいち」の年間経費は約900万円超、現状は不確定な助成金に頼って運営しています。自主財源の確立は、まず会員の拡大です。賛助会員の会費3000円、換算すれば1日=10円。ぜひ会員となって「ピースあいち」を支えて下さい。

## 「ピースあいち」への交通のご案内



## 【ピースあいちの利用案内】

- 開館日 火曜日～土曜日
- 開館時間 午前11時～午後4時
- 休館日 日曜日・月曜日・年末年始
- 閲覧料 大人 300円 小中高生 100円
- 2階の常設展示室のほか、1階には「現代の戦争と平和」というテーマの常設展示、3階には「戦争と動物たち」の展示があります。1階には戦争に関する図書や戦争体験談のDVDライブラリーがあります。1階のみの利用は入館料は無料です。
- 学校や団体の見学で、展示ガイドや体験談を希望される場合は、事前にご相談下さい。
- 駐車場は2台分あります(300円)。他に障がい者用が1台分あります(無料)。

## ●編集後記●

当館には約90人のボランティアがいる。その基本的な任務は、各週ごとの当番である。4～6人が終日当館に詰めていて、来館者の案内や質問に答えたりしている。また、仕事を分担するため、グループが作られている。総務、財務、イベント、編集委員会、ボランティア、図書、資料、広報、映像、戦跡班などがあり、企画展では新たなチームを作る。

メンバーのほとんどは年金生活者だが、弁護士、印刷、看板、編集企画業といった自営業の方、専業主婦、学芸員や司書という資格を持つ方もおられる。まさに多士済々である。

そのような仕事なら私にもできる、ボランティアをやってみたいなと思われた方は、いま当館にご一報下さい。(S)